

ヒマラヤ

南 出喜久治
平成22年6月3日記す

インドに古くから伝わる、こんなお話があります。

インドの北に、ヒマラヤという世界でいちばん高い山々が集まっているところがあります。ヒマラヤというのは、その土地の言葉で「雪の住みか」という意味です。一番高い所では、一年中雪で被われていますので、雪が住んでいる所、というにふさわしい所です。

そのヒマラヤの中腹に、太い竹が生い茂った大きな森があり、そこには、たくさんの鳥や獣が住んでいました。ある日、強い風が絶え間なくその竹の森に吹き続けました。そして、竹と竹とが風のために強くこすれ合って火が出ました。そして、吹き続けている強い風のため、その火がまたたくうちに周囲に燃え広がり、あつと言う間に、大きな山火事となりました。すると、ここに住んでいる虎などの獣たちは、慌てふためき、自分たちの森を守ろうとして、懸命に火を消そうとしましたが、風の勢いが強く、まったく手が付けられないため、ついに諦めて、火が届かない岩陰に隠れることしかできませんでした。

ところが、一羽の小鳥が急に飛び立って、山の麓にある池まで飛んで行きました。そして、その池で体を濡らして、燃えている山火事の方へ飛んで行き、山火事の上から一生懸命に羽を振って水

滴をたらしめました。そして、再び麓の池まで飛んで行き、何度も何度も、同じことを繰り返しました。何十回、何百回と繰り返して疲れ果てましたが、それでも小鳥は止めようとはしません。

虎たちは、自分たちがやってもできないのに、小さな体で、そんなことをしても無駄なので、やめろ、と小鳥に言います。けれど、小鳥は止めません。すると、この様子を見ておられた仏さまが現れて、小鳥にやさしく尋ねます。

「お前の羽で運んでくる程度の少ない水で、山火事の火を消せると思うのかね？」と。
すると、小鳥は答えます。

「消えるか消えないかは私には分かりません。けれど、これをしなければ森の仲間たちは、みんな焼け死にます。何もしないで仲間たちを見殺しにすることはできません。何とかして助けてあげねばなりません。私にできる事はこれしかありません。また、私たちが仲間を仲良く住まわせてくれた森への、私のできる精一杯の恩返しはこれしかありません。愚かな事と思われるかもしれませんが、どうかこれを続けさせて下さい。」と。

そして、仏さまの前を飛び立って、再び池に向かって同じことを繰り返しました。そこで、小鳥の言葉と行為を受け止めて、仏さまは深く大きくうなずかれると、黒い雲が急に現れて雨を降らし、それが大雨となり、たちまち山火事の火が消えてしまいました。

どうでしたか。このお話が何を意味するのかということについて、いろいろな考え方があります。もともと、これは仏教のお話ですから、仏さまには大きな力があることを説くための作り話です。しかし、本当はそんな小さな意味には治まり切れないほどの大きな意味がこの話には含まれているのです。

大雨が降って山火事が消えたのが仏さまの力であったか否かとはまったく関係なく、小鳥の行ったこと自体は、理屈の世界で考えれば、それこそ「焼け石に水」であり、虎たちの言うとおり全

く無駄なことです。しかし、それを続けることは、生命の持つ力（本能、小鳥の行動）によるもので、決して理屈（理性、虎の判断）だけで、人の行いを判断できないことを説いているのです。病気が治らず、意識を回復することのない植人物人間になっても、その人の心臓は、鼓動を繰り返します。もし、心臓が鼓動を続けても無駄だという、理屈の判断ができるとすれば、心臓は鼓動を止めるはず。しかし、そうならないのです。それは、最後まで諦めずに生き続けようとする生命の力（本能）があるからです。

あなたたちの学校での試験のときでも、武道などの試合のときでも、たとえ歯が立たず全く手に負えないことが判っているとしても、最後の終了の合図が出るまで、必死になって工夫して踏ん張ってみるのです。それが生命力（本能）と精神力（意思）を鍛え、その悔しやをバネに、次の試験や試合のときに挽回して、逆転できる力を養ってくれるのです。

このことは人生も同じです。どんなときでも、理屈だけで判断して、決して諦めてはいけません。目的は果たせなくても、最後までやり続けるあなたの生き方が、周りの多くの人に感動を与えます。そして、あなたは、その人たちの心の中です。いつまでも生き続けることができるのです。